

東勇作メモリアル (2)

— 『牧神の午後』の壺・陶板 —

展示期間 /

2015年11月25日(水)～2015年12月25日(金)

企画・構成 /

関典子 (薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

東勇作メモリアル

「薄井憲二バレエ・コレクション」の中から、薄井氏の師にあたる東勇作(1910～1971)のシリーズをお届けします。2014年10月19日、『牧神の午後』を踊る東勇作の銅像(村田勝四郎作)が、仙台市青葉区の西公園に設置されました。これは、「私たちの師匠だった東は長い間存在を忘れられていたが、故郷の仙台に銅像を移すことで、功績を後世に伝えたい」との思いから、薄井氏が、当初設置されていた福岡市のRKB毎日放送敷地内から譲り受け、寄贈したものです。

本展では『牧神の午後』をモチーフとする東自作の壺や陶板、ワツラフ・ニジンスキーを描いたジョルジュ・バルビエの原画などを展示。日本バレエの黎明期を支えた東勇作氏、そして、薄井憲二氏のバレエに対する想いや煌めきを、ご堪能ください。

東勇作とは — 薄井憲二

東勇作は、バレエ舞踊家を目指して仙台から上京した。バレエ芸術の殆ど存在しない当時の日本にあって、伝手を求めて習練に励み、英仏語による資料に学び、自らのバレエを確立し1941年バレエ団を設立した。西欧の作品を自分流の解釈で上演し成功したが、東の真骨頂は、習得したバレエの土台に、自らの舞踊性をのせた、自分のための独舞であった。その芸術性、独創性、高度な技術は、東自身以外誰れにも伝え得ず、残念ながら消滅した。

主な出展リスト

- ◆東勇作『牧神の午後』壺(日本1961年)
- ◆東勇作『牧神の午後』陶板(日本1950年代)

◆ワツラフ・ニジンスキー『牧神の午後』ジョルジュ・バルビエ画
限定書籍(フランス A La Belle Édition, Paris 1913)

◆参考映像『東勇作と牧神の午後』
(仙台・ことりTV 2015年9月)

東勇作『牧神の午後』 — 薄井憲二

東の『牧神の午後』は周到なりサーチの末に振付けられ、出来得る限りニジンスキーの原作に近づけるべき意気込みが見られたが、のちのセルジュ・リファール版に影響されたところもあった。

最初に小高い岩の上に想っている牧神は、笛を吹いているのだが、東は笛は使わなかった。右手の手のひらを観客に向け、親指と小指を出来るだけ開いて間隔を開け、中の指三本を曲げて手のひらに密着させ、笛の形をつくるのである。これはリファールの新版のときに出来たポーズである。また、ブドウを食べるときに小道具は使わず、手の動きだけで見せる。足には、サンダルは片足しかはいていない。すべてリファールに従っているのである。

東の『牧神の午後』は、原作のアイデア通りに、ギリシャの甕絵(かめえ)に似せて身体の側面のみをみせ、ニンフ達も殆ど正面には向かない。古典舞踊の技法からは離れているものの、動きの流れは東の創作力、舞踊性をよく語っており抒情的であった。後年にニジンスキーの原作を見て、ニジンスキーが古典舞踊からの脱却、乖離にのみ固執している傾向があると知ったが、東のそれは、もっと自由に、もっと自然に出来ていると思った。ニジンスキーの執念には、ところどころ胸を衝かれるところがあるが、東の「牧神」は、どこを切り取っても美しかった。(中略)

最後の華やかな公演は1967年1月31日虎ノ門ホールで開催された「東勇作舞踊40周年記念公演」であった。観る人は、東の肉体に少しも衰えがないのに驚嘆した。上半身裸のこの作品では、肉体の美しさが重要である。東はこのとき57歳に近い。格別に鍛錬の励んだ様子はないから、これも天与のものだったのだ。

もしかしたらこのときの『牧神の午後』を東勇作の白鳥の歌とすべきかもしれない。この公演は大部分NHKが放映したが、残念ながら記録は残っていない。このあと、東の活動は徐々に減っていく。

(薄井憲二著『生誕100周年 記念誌 牧神～或いは東勇作～』
東勇作同門会・東博子 2010年 18～19頁 51～53頁)



兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町 2-22

tel: 0798-68-0223 fax: 0798-68-0212

※ 禁無断転載・複製・引用